

はじめに

仏教の中で浄土教を捉えたときに、凡夫往生ぼんぶを説くことが最も特徴的であると言える。それでは凡夫はどうすれば往生できるのであるか。それに対する回答は善導大師（以下尊称を略す）によって与えられた。善導によれば往生のためには安心・起行・作業きぎょうという三種の要件があると言う。浄土教であれば起行は念仏であることは容易に想像が付き、また作業とは念仏をどのような状態で称えるかということである。そう考えるとどのような心で念仏を称えるかが最も重要なことであると考えられる。

生きるという一つの問題に対して、どのような気持ちで毎日を生きるのかということが最も重要であることは、それが宗教の一つの役割であることから明らかである。浄土教が普遍的宗教の一つであるならば、この心の問題は必ず現代にも通じるはずである。浄土宗の歴史を通じてその心の問題がどう取り扱われ、またどのようなことが問題になったかを明らかにすることが、現代における安心を考えるうえで基本となる。このようなことを明らかにすることを目的に安心というものを取り上げた。

安心を論ずる前にその前提になるものについて、まず明確にしておきたい。

私がここで論じたいのは、浄土教における安心であって法然の流れを汲む人たちの安心で

ある。そのように限定する理由は法然の安心論は選擇がその前提となつてゐるからである。ただ単に心の問題を取り扱うことは非常に困難であり、人それぞれの生い立ち、価値観まで掘り下げなければならぬことがしばしばである。このような広範な価値観を持つ人々を一つの論文で論じることが非常に困難であり煩雜となる。

そこで、法然の選擇を正しく理解した人々（何が正しいかは別として、その選擇に触れ、法然に帰依した人々を言う）を対象に、その中でも特に異論、異流が生じた問題点を心の持ちようの側面から比較検討することを本論の目的とした。

法然門下の安心論を調べる前に善導、法然がそれぞれ安心をどのように考えていたのかを正しく理解する必要がある。つまり後世の人が主観的に解釈した部分を除き、その著作に書かれた言葉をはつきりと把握しなければならない。言葉の裏側に隠された精神を汲み取ることも必要ではあるが、まずはそれをせず善導と法然の安心論を最初にまとめてみたい。その後、門下の安心についてまとめ、最後に比較検討したい。